



2018 年 (平成 30 年)
8 月号 (No. 879)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

心の底に光を当てるといふこと。 ゴタルー(牧畜民)をやる気にさせた ネパール・ランタン谷支援顛末

2015年4月25日、ネパール中西部を襲った巨大地震。この大地震でとりわけ壊滅的な被害を受けたのがランタン谷だった。早速、当会も義援金を贈ったが、あれから3年、かつて「地球上で一番美しい谷」と言われた谷の復興ぶりを、NGOランタンプランの活動を中心に、江本会員にレポートしてもらった。

江本嘉伸

7月1日、東京・市ヶ谷のJICA
A市ヶ谷ビル2F国際会議場で、
ある報告会が開かれた。「大地震
から3年、村人は自立に向けて歩
みはじめた」ランタンプラン20
15「2018」という長いタイ
トルの報告会で、主催はNGOラ
ンタンプラン(代表・貞兼綾子)。
大地震のために義援金を募った、

当会をはじめとする山岳6団体が
後援する形となった。
貞兼さんをよく知る者としてラ
ンタンプランの支援がいかに村人
たちを励ましたか、その結果、な
ぜチーズ保管のための場所が切実
に必要となったのかなど、「貞兼
綾子とランタン谷支援」の内幕を
報告させていただく。



今年もゴタルーたちから搾り立てのゾモのミルクをもらった貞兼さん(右)

報告会から見たもの

2015年4月25日のネパール
中西部を震源とした巨大地震は、
ネパール国内で90000人近くが
死亡、50万戸が全壊する甚大な被
害をもたらした。なかでも壊滅的

な被害を受けた地域の一つが、貞
兼綾子さんと縁の深いランタン谷
だ。地滑りと雪崩で谷の大部分が
土砂に埋まり、4つの集落のうち
2つは全戸倒壊。131世帯67
1人の住民のうち、4分の1強の
11世帯175人を失った。
貞兼さんは、NGOランタンプ
ラン(後述)の仲間たちと「ゾモ・フ
アンド」を立ち上げ、雪崩で失われ
たゾモ(ヤクと牛の交配種の雌。雄
はゾ)100頭を目標に、ゴタルー
(牧畜民)たちに贈る支援を開始し
た。ネパール大地震支援募金を展
開した当会をはじめとする山岳6
団体は、この貞兼さんたちの行動
を支持し、寄せられた28000万
円の寄付の中から1000万円が
ランタンプランに寄贈されたこと
は、この会報でも伝えられている

目次

心の底に光を当てるといふこと。 ゴタルー(牧畜民)をやる気にさせた ネパール・ランタン谷支援顛末	1
第34回全国支部懇談会を北海道・ 層雲峡温泉で開催	4
石川県能美市で自然保護全国集会開催される・ 支部長が代わりました②	6
第38回日本登山医学会学術集会開催される・ 追悼 大塚博美さんを偲ぶ	8
活動報告 山行委員会	10
新入会員	11
支部だより	12
山梨支部／越後支部	13
図書紹介	14
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

とおりである。

7月1日の報告会は、(1)報告ランタン谷2015～2018春／貞兼綾子 (2)大なだれのメカニズム／澤柿教伸(法政大学) (3)村を襲った懸垂氷河のゆくえ／奈良間千之(新潟大学) (4)ヒマラヤのミジンコ・映像とトーク／竹内望(千葉大学)・坂田明(ミュージシャン、映像出演)の4部構成。貞兼さんは、いかに山岳諸団体からの支援金が役立ったか、具体的に報告した。そして、これまでは互いに接点の薄かった村人と日本の学者たちの距離感が狭まったことを、成果として指摘した。

村人たちは、とりわけ安全な村づくりのためにどんな場所への移住がいいか、日本の学者たちが目指しているハザード・マップの制作に大いに注目した。そして、村人学者の双方から信頼されているのが、貞兼綾子という人なのだった。「貞兼さんの行動力、ランタン谷の人々を思いやる気持ち、僕たちを動かすんですよ」と、報告会の進行役を務めた樋口和生さん(57次南極観測隊越冬隊長)は言い、「なんとと言っても言葉の天才ですから」と付け加えた。確かに貞兼さ

んのチベット語は、7つの方言を自在にこなすレベルである。70歳という年齢を全く感じさせない行動力と谷の人々への深い思い。ランタンの人々も日本の学者たちも、彼女の本気に動かされていることが伝わってくる報告会だった。

貞兼綾子さんとランタン谷

1974年から79年にかけて、カトマンドウのトリブヴァン大学ネパール・アジア研究所で民族学を専攻した貞兼さんは、75年、初めてランタン谷を訪れた。当時は、地球上で一番美しい谷」と喧伝されたことからトレkkerが増え続けており、家畜を手放してホテルやロッジを建てる人が増え始めていた。「ツーリズムが村をダメにする」という若者の言葉に、貞兼さんは衝撃を受けた。

ランタン谷が国立公園に指定されると環境保護の機運が高まり、85年には、薪を使う村民は立ち退くようにと政府が指示。困った当時の村長は貞兼さんに助けを求めた。薪に替わるエネルギー源として小規模水力発電を導入しよう、と86年「ランタンプラン」が発足した。ランタンプランは87年から93年

の間、キャンチェンのロッジで氷河の湧き水を使った小規模水力発電の試験運用を実施した。日本から持ち込んだのは直径60cmの金属製の水車のみ。当時、この仕事のため日本から派遣されたのが、北大を卒業したばかりの青年、30年後、南極越冬隊長となる樋口和生さんだった。1kwの発電機によってランタン村初の電球の明かりが、本村から少し離れたキャンチェンにあった唯一のホテル、ゴンパ、観測小屋に灯ったときの喜び。落差10m、100W電球10個分しか発電できない規模だったが、それがどんなに嬉しかったことか。

94年には村に公民館を建てて通電、夜間学級で識字教育も行なった。その後、99年から2006年にかけて村の全戸に配電するともに、電気を使ったチーズやパン作りのための工房を建設、日本の職人に指導を仰いだ。通電管理のための「公民館委員会」が発足し、プロジェクトはようやく貞兼さんたちの手を離れ、安定した運営が可能になったところに地震が起きたのだった。

山岳団体の支援金を



大地震直後のランタン村の様子。撮影＝大阪市立大学山岳会・兵頭渉

背負い上げてゴンパ再建

チベット系住民にとつて、ゴンパ(寺院)は何よりも大事な心の拠り所だ。地震で壊滅してしまったキャンチェン・ゴンパの再建は、貞兼ミッシェンの重大な目的だった。ここ3年、毎年2、3回もランタン谷に通い続けては村人たちの相談に乗ってきた貞兼さん。2017年5月初旬に下山するときにはすべての解体作業が終わり、無傷で残った4本の柱とそれを支える天井部分が残っているのみだったが、1年をかけて再建作業が進み、寺大工や石工などランタン谷の南、ヘランブー地方から来た職人集団がゴンパ再建を担い、差配のセン・



最高齢のゴタルー、ソナム・ギャルツェンさん(82歳)とチーズ

3名います」
17年のチーズ生産量は462・1kg。前年の3倍近くもあった。これをランタン酪農組合が買い上げ、仮の貯蔵庫にストックして翌年初めころまで売る計画という。「ゴタルーたちは、今はゾモを増やすよりは貯蔵

ノルブと村人たちが指揮をとった。そして、この再建資金を背負い上げたのは、貞兼さん自身だった。「春に300万^{ルビ}、今回450万^{ルビ}、合計日本円で800万円。最終的に1000万円と予想しています。このお金は日本の主要山岳6団体からのご寄付によるものです。皆さんのご協力に感謝申し上げます」と貞兼さんは書いてきた。ずっしり重いお金を背負って山路を登る、あやさん(貞兼さんの通称)の心意気が伝わる。

執り行なわれた。
今まではランタンプランが主体となつて谷の人々を支援してきたが、地震を経験して、主体は村人たちで、NGOは彼らのすることをサポートするという、あやさんが望んできた形に変わってきた。それは、彼らがこの30年間に学んだことを蓄積して実践する実力を付けたという証しだった。

チーズの貯蔵庫が欲しい!

貞兼さんのメール報告で躍動感に溢れる箇所は、ゴタルーたちのチーズ作りへの取り組みだった。「嬉しかったのは、昨年はチーズを作った者は右岸の5名のみでしたが、今年は新しくゴタルーに復帰した2名を含め19名全員がチーズ作りをしたことでした。女性も

庫や販売設備の充実を、と言っています」と、あやさん。

送られてきた写真の中には、フランスの形のイタリア風チーズ「カチョカヴァッロ」が天井から吊るされた風景が目を引く。ゴタルーたちがやる気になったので、この際、チーズの貯蔵庫を造って村人の経済を支えてあげたい。日本では豪雨被害など大変な時期であることを承知で、いまだし支援をお願いできれば、と訴える。

【チーズ貯蔵庫のためのカンパの窓口】郵便振替 口座記号番号: 02720071102137 加入者名: ランタンプラン

ゾモTシャツ、トートバッグのささやかな支援

最後に、貞兼綾子さんの奮闘を目の当たりにして、地平線会議の仲間たちも立ち上がったことを報告させていただく。私たちは「地平線通信」という情報誌を毎月発行しているが、その中でイラストを担当する長野亮之介さんにゾモの絵を描いてもらい、ランタン谷のゾモを増やす目的でTシャツを作ったのだ。名付けて「ゾモTシャツ」。制作はゾモ普及協会(代表は江本)。

2000円で販売し、半額の1000円はランタン谷のゾモ購入資金に回される。愛らしいゾモのイラストが好評で、すでに100万円分がランタン谷のゾモに代わった。地元の子どもたちにも人気で、さらに新デザインで、と張り切っている。Tシャツ購入については地平線会議のウェブサイト <http://www.chiheisen.net/> だ。

1年余り前になるが、樋口和生さん率いる第57次南極越冬隊が、年次に合わせて57着のゾモTシャツ購入し、南極で隊員たちがそろってTシャツを着用している写真を送ってくれた。この57着のTシャツの支援金で購入したゾモには、隊員がランタン谷に行ったときに、自分が贈ったゾモだと分かるように「メト(花)」という可愛らしい名前が付けられたそうである。

「甚大な被害を被ったランタン村の復興支援のため、多くの皆様のお力もいただきながら、かつてこの村に明るい電灯を灯したように、ほんの少しでも希望の道筋が付けられれば、と念願しています」とあやさんは言う。ヒマラヤの谷で、山の民と一つになった日本人の、支援の現場がなお続く。

REPORT

第34回全国支部懇談会を北海道・層雲峡温泉で開催

北海道命名150年の年に

第34回日本山岳会全国支部懇談会が、北海道支部の主催で大雪山系・黒岳の麓、層雲峡温泉「層雲閣グランドホテル」で7月21日(土)・22日(日)に開催された。西日本豪雨をはじめ想定外の気象災害が襲う今年の日本列島だが、北海道も7月は集中豪雨があったり、まるで本州の梅雨のようなぐずついた天氣が何日も続いたりして、私たちの一番の心配も天氣だった。懇談会1日目は曇りときどき晴れのまづまずの天氣で、氣温も上昇し、夏らしい一日となった。

今回の懇談会には、北海道外からは27支部の会員らと本部の役員合わせて156名が参加、北海道支部の参加者を入れると総勢は188名となった。開会の午後3時までにほぼ全員が受付を済ませて会場入りした。受付横のテーブルには祝いの品の各地の銘酒がずらりと並び、会場のあちこちで旧知の参加者たちが懐かしそうに言葉

北海道支部 藤木俊三
を交わし、いかにも全国支部懇談会らしい光景が見られた。

開会式では、まず北海道支部の西山泰正支部長が「今年はこの北の大地が北海道と命名されてから150年になる。この記念すべき年に、カムイミントラール神々の遊ぶ庭」と呼ばれる大雪山に全国から多くの方々をお招きして、このように盛大に支部懇談会を開催できることをうれしく思う」と歓迎の挨拶を述べた。

続いて小林政志会長が挨拶に立ち、「私は北海道出身なので、今回の支部懇談会は去年のうちから絶対出席しようと決めていた。また、高校生までしか北海道にはいなかったのが大雪山に登るのも初めてで、交流登山もとても楽しんだ」と述べた上で、全国支部懇談会が始まった経緯や創立年度の古い支部はすでに2度開催していることなどを話され、北海道支部にとっても2度目となる支部懇談会を祝う言葉を頂戴した。

この後は、山岳写真家で地元層雲峡にある大雪山写真ミュージアム館長、そして北海道支部の会員でもある市根井孝悦さんが「母なる大地 大雪山に魅せられて」その魅力を全世界に」と題して記念講演。スクリーンに作品を映しながら、自分がいかにして山岳写真の世界に引き込まれ、なぜ大雪山をライフワークとするようになったか、さらに撮影にまつわる様々なエピソードを語っていた。

入浴時間などを挟んで午後6時から懇親会に移り、この席には地元上川町の佐藤芳治町長も来賓として出席していただき、歓迎の挨拶と大雪山に抱かれた町のPRをしていただいた。この中で、上川町が中心となって北海道の12の市や町が今年度の日本遺産に申請した「カムイと共に生きる上川アイヌ」大雪山のふところに伝承される神々の世界」が、5月に文化庁からめでたく認定されたことに触れ、申請から認定に至るまでには様々な苦労があったこと、自然と共生してきたアイヌ民族の知恵に学びながら、豊かな大雪山の恵みを活かした町づくりを進めて

いることを話された。



開会にあたって挨拶する西山北海道支部長

また最後に、山の環境保全のネックになっているトイレ問題を解決するため、7月10日に環境省、地元自治体、山岳団体など官民一体となった「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」が出され、上川町で発表会が開かれたことも紹介していただいた。

重廣恒夫副会長の乾杯で開宴後は、上川町在住の3世代のアイヌ家族「井沢家」によるムックリ(口琴)の演奏や民族舞踊が披露された。和氣あいあいの歓談の輪があちこちででき、各支部からいただいたお酒も次々と空になって、あつという間に時間が過ぎ、次回の



快晴強風の中、白雲岳をバックに北海岳を目指す

開催地、栃木の渡邊雄二支部長による日光で開催の第35回全国支部懇談会への参加呼びかけと、中締めの万歳三唱でお開きとなった。

ベストシーズンの大雪山を満喫

翌22日はいよいよ交流登山。天気予報どおり早朝は曇り空で雲も低く、4時過ぎには雨も降りだし、赤岳・黒岳縦走のAコースがホテルを出発するところには、雨具がないと外は歩けない本降りに。登山決行が中止か主催者としては大いに悩んだが、スマホで気象台のリーダー画面を確認して、強い雨雲は午前9時ごろには東に抜けると判断、Aコース参加者71名は、バ

スに分乗して午前6時に層雲峡から赤岳登山口の銀泉台に向かった。登山口に着くころには雨は小降りになり、7時過ぎに9つのグループに分かれ黒岳を目指して出発する。Aコースは多様な高山植物が楽しめる、花の縦走コースとして人気がある。

比較的大きな雪渓を2つ過ぎると、岩と砂礫の平坦な台地「コマクサ平」に出る。ちょうどコマクサが満開で、参加者たちも撮影に大忙しだった。先頭グループはここまですべておおよそ1時間半、ペースが遅い後ろのグループとは1時間近い差が開いたが、雨も完全にやみ、ガスも晴れてきて眺望が利くようになつてきたため全員が縦走を続けることになり、先に進む。

コース中一番の難所と思われた急な通称「第3雪渓」も、下から3分の1ほど雪の斜面を登ったあと夏道に出て、特に問題なく通過した。広い第4雪渓横の登山道を登り、道が平坦になると赤岳は間近だが、このあたりから急に風が強くなり始める。おおよそ3時間で巨岩を積み重ねたような赤岳山頂に到着。岩に身を寄せて、風速15m前後の強風を避けながらしばし休

憩し、会旗を掲げてグループごとの記念写真を撮影した。

すっかり防風対策をして、赤岳から小泉岳を経て先頭グループが白雲岳分岐から北海岳に向かうころから上空には靑空が広がり、烏帽子岳、黒岳をはじめ周囲の山々がはつきりと見え、遠くには大雪山系の最高峰・旭岳が姿を現わすまで劇的に天候が回復した。ただ、強風は一向に収まらず、北海岳山頂周辺では体が持つて行かれそうになったり、吹き飛ばされた礫が顔に当たったりするほどで、おそらく風速は20mを超えていたと思われる。そんな中を御鉢平のカルデラやそれを囲む間宮岳、北鎮岳、凌雲岳などの大展望を楽しみつづき黒岳に向かった。

北海沢源頭のエゾコザクラの大群落を過ぎて、ハイマツの小さな尾根を越えると赤石川の徒渉点に出るが、浅瀬でも登山靴の少し上ぐらいの水量だった。この後、黒岳石室を経て黒岳頂上までがこのコース最後の登りとなる。

午後2時くらいからは再び曇り空になり、ガスも出始めて眺望も今一つとなる。黒岳を下ると風は全くなくなり、9合目前後では、黄

色のチシマノキンバイソウの群落に目を奪われる。午後3時前後に先頭グループが下山、足の不調や体力不足で遅れた最後の参加者がロープウェイの山頂駅に着いたのは午後4時半だったが、Aコースは参加者全員ケガや病氣、事故もなく、無事、赤岳から黒岳まで縦走することができた。5日前の偵察時より高山植物の開花状況も予想以上に、というより予想に反して非常に良くなつていて、文字どおりベストシーズンの大雪山を見ていただくことができ、主催者としては満足のいく交流登山になった。

また、黒岳往復のBコースは、出発を1時間遅らせて天気が回復してから登ったので、頂上からの眺めが楽しめたとのこと。層雲峡周辺を散策するCコースも、最初に市根井さんの写真ギャラリーを観覧してからロープウェイに乗り、リフト終点の7合目付近を散策して展望を楽しんだとのこと。

最後に、主催者として行き届かない点が多々あったと思うが、皆さんのご協力により無事、支部懇談会を終えることができたことに心から感謝申し上げます。

(北海道支部事務局長)

REPORT

石川県能美市で自然保護全国集会開催される

石川支部 中川博人

2018年度自然保護全国集会（自然保護委員会主催・石川支部主管）を7月8日（日）～9日（月）の2日間の日程で、石川県能美市辰口町の辰口温泉「まつさき」にて70名を超える参加を得て開催した。

本年度は石川県を代表する名山で、昨年開山1300年を迎えた白山にちなみ「白山をめぐる動植物の現状と今後」をメインテーマに、8日は「まつさき」で支部報告・基調講演・分科会・懇親会を、9日は期間限定公開中の白山高山植物園でフィールド・スタディを行った。

7月8日／支部報告・基調講演・分科会・懇親会

初日の8日は、西日本を中心とした带状前線による豪雨災害発生の影響を受けて、JR北陸線敦賀～福井間での運休をはじめ交通機関に混乱があったものの、予定どおり開会することができた。

近藤雅幸・自然保護担当理事の開会宣言、司会進行により来賓の

井出敏朗・能美市長の挨拶、続いて樽矢導章・石川支部長・谷内剛・日本山岳会常務理事の挨拶の後、

川口章子・自然保護委員長より本部自然保護委員会の活動方針について説明がなされた。次に各支部による活動報告へと進み、石川支部からは安田二三男・自然保護委員より、石川県内では絶滅したと言われていた花「カザグルマ」発見の経緯について報告があり、今後は天然記念物指定を目指して保全し、地域の宝として大切にしたいと抱負を語った。

その後、日本山岳会理事会を代表して出席された野澤誠司・副会長より挨拶があり、基調講演が行なわれた。

基調講演は前白山自然保護センター所長の梅典雅氏。「白山の自然と歴史・文化」と題し、1時間半にわたりプロジェクトによる豊富な資料映像を交えて語られた。ここでは、白山を取り巻く動植物を含めた現状と課題や、歴史的・文化的側面から白山について広く

話され、自然学にはいまだ活火山であることの啓発も忘れず、また、白山のブナ林は日本有数の広さと規模を有し、「白山は水といのちの源 未来に引き継ぐ私たちの宝」であると締めくくられた。

基調講演の後、参加者は3つのテーマの分科会に分かれ、それぞれ講師の下で1時間の講演、参加者によるディスカッションが行なわれた。

第1分科会は、梅典雅氏が基調講演で語られた内容について、さらに深くディスカッション形式で行なわれ、特に山岳環境において課題となっている、山のトイレ問題について多くの意見交換がなされた。

第2分科会は、いしかわ動物園園長の美馬秀夫氏が「トキとイヌワシ、ライチョウと動物園ができること」の演題で講演された。美馬氏は地元石川県で36年間にわたって自然保護行政に携わってきたおり、現在、いしかわ動物園が取り組んでいるトキとイヌワシの飼育状況や、ニホンライチョウの孵化についてのタイムリーな講演内容であった。

第3分科会は、東邦大学理学部



梅典雅氏による基調講演

講師である下野綾子・自然保護委員により「植生変化をとらえるには―植生調査の基礎知識―」と題してセミナー形式で行なわれ、参加者各自が今後、植生調査活動を行なうにあたっての基礎知識について講義があった。

分科会終了後の懇親会では、自然保護委員同士の交流を深めた。

7月9日／フィールド・スタディ

2日目のフィールド・スタディは、期間限定で公開されている白山高山植物園へ移動し、研究の様子を見学した。

この植物園はNPO法人白山高山植物研究会が、白山に自生する



残雪の白山を望みながらの、白山高山植物園でのフィールド・スタディ

ブナ帯以上の種子植物全種類（545種）の栽培・育成を試み、究極的には白山に自生する種子植物全種（1321種）を栽培・育成すること。それらによって絶滅危惧種をはじめとする種の保全、植生復元、緑化等のノウハウを蓄積することを目標に運営しており、これまでに400種類以上の植物種の

馴化試験に着手したとのことである。また、特筆すべきこととして、栽培についてはクローン技術や無菌培養などを用いず、すべて種から栽培を行なっているとのことである。

到着後、まず温床施設で植物園の責任者である白井伸和氏から前述の白山高山植物園設立趣意の説

明を受け、その後、育苗状況を見学した。ここではそれぞれの苗について種を採取した地点の位置情報が記されており、その管理の厳密さに参加者は驚きを持って感心させられた。次に温床施設上部にある西山駐車場へ移動し、バスから降りると、そこには前日までの荒天と打って変わって、澄み渡った青空に残雪を輝かせる白山が雄大に広が

り、参加者を喜ばせた。

すでに最盛期は過ぎているものの、植生地の状況を忠実に再現した園内は、ニッコウキスゲをはじめシモツケソウ、ハクサンフウロなど多くの花が咲き、写真を撮る参加者の脚もなかなか進まないなか、白井氏の解説にも皆、熱心に耳を傾けていた。

フィールド・スタディ終了後は、当初の予定時間どおり14時にJR小松駅に移動し解散、事故もなく無事に全日程を終了した。

最後にひと言

日・月曜日の開催にもかかわらず、全国各地より参加していた自然保護委員、また、準備段階から協力してくれた石川支部の会員、会友、関係方面には心より感謝申し上げたい。

これまでのような支部独自に実施する事業とは異なり、本部委員会との連携では進行方法の調整など、戸惑いや苦労する面はあったものの、参加した支部員にとって自然の大切さ、有難さ、守る意識の大切さを改めて考える良い機会になったのではないかと思った次第である。

支部長が代わりました②

石川支部 樽矢導章さん

支部長を拝命しました樽矢導章です。中川前支部長には20歳代前半より登攀技術や様々な山の楽しさを教わりました、こうして現在でも登山を楽しめ、また、山岳会の方々と交流をさせていただけるのも前支部長や支部の先輩・仲間のおかげだと感謝しております。

支部に入会したころは、支部が東部ヒンドゥー・クシユのティリッチミール登頂後間もなくで、入会直後に3月の剣岳・小窓尾根登攀に参加、その後は夏・秋・正月の各合宿にと、剣岳を中心に岩と雪を求めて山行を重ねていました。また日本ヒンズークシユ・カラコルム会議に参加し、型破りな先輩たちに圧倒されながら未知の山々に思いを寄せていたことを懐かしく思います。1975年には、元



石川支部長 樽矢導章さん

支部長の津田先輩とふたりでパキスタン・チトラルに滞在し、周辺を探索したのが印象に残ります。その後、76年4月に日本山岳会へ入会させていただきました。

現在の石川支部は、会員・会友・準会員合わせて59名、平均年齢65歳ですが、会員高齢化・会員減少が目前にきていますので、まずは会員の情報共有や山行報告の場として月例会を行ない、山岳会としての雰囲気を作りながら山岳会会員としての自覚を促して、支部の活性化につなげていきたいと思います。また、多様な年齢層を踏まえ、各年代でも安全に楽しく山に接することのできる山岳会でありたいと思います、そのためには、皆が参加できる山行や集会の計画や企画を立てることの楽しさも共有していければ、と考えます。

石川支部は単一的な山岳会のようではありませんが、県内ほかの山岳会会員の参加も多く、日本山岳会の開かれた風通しの良い伝統を受け継ぎ、公益社団法人としての立ち位置をも見据え、先輩会員のご指導や支部員のご協力をいただきながら、支部の発展に全力で取り組んでいきたいと思っています。

信濃支部 米倉逸生さん

1964年、松本深志高校山岳部に入部し、山登りを始めました。長い学生生活を通し山登りに没頭。しかし、体調を崩し、やむなく山から足を洗うことに。

1985年、先輩を訪ねた際、開口一番「山岳会に入れ!」と言われ、有無を言わず入会させられることになりました。しかし、仕事最優先の世代で、会務はウェストン祭の手伝い程度。山心の劣化防止のため、記念山行の徳本峠越えと正月の常念岳、それに春の山スキー程度でした。

仕事にも少し余裕ができてきたころ、青春時代に憧れた海外の山に行ってみたくなり、ヒマラヤ、アンドス、天山などの山に向かうようになりました。会務にも少しずつ携わるようになり、2013年から事務局を担当し、ようやく



信濃支部長 米倉逸生さん

会の現実と課題に向き合うこととなりました。

当支部で最も重要な事業は、72年もの歳月を重ねてきたウェストン祭です。これは、すでに地域的な重要イベントとなつていますが、我が国の近代登山の歴史を紐解く機会として、また、山岳環境保全や安全登山を啓発する場となっているのは言うまでもありません。

ただし、72回を数える中では、様々な出来事もありました。特に1973年5月、支部が派遣したアンナプルナーI峰登山では、4人の隊員を雪崩で失うというアクシデントに見舞われました。しかし、その混乱と失意と悲しみの中でも、ウェストン祭はいつもと同じように開催されたのです。この事実には、改めて支部の先輩への深い敬意と感謝と誇りを感じています。

支部長として、この伝統を継承していくことに責任の重さを感じています。確かに高齢化は支部としても憂慮すべき事態ですが、高齢会員の持つ経験や知識も会の資源です。こうした資源も活用しながら、開かれた活動を軸に次代への継承を模索していきたい、と考えています。

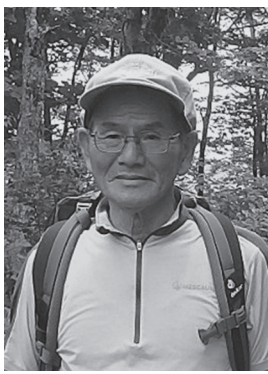
支部長が代わりました②

広島支部長 齋 陽さん

このたび、広島支部の支部長に就任しました齋 陽と申します。

私は1941年に、島根県との県境にある山里で生まれ、子どものころは近くの川でイワナやアマゴを釣り、冬には近所の猟師さんと一緒に、野ウサギやキジやヤマドリを追い掛け回る環境で育ちました。また、西中国山地の冬はかなりの積雪があり、10歳ごろからスキーを始め、雪の締まる3月には、たびたびスキーを担いで大山に登り、山頂から元谷コースを滑っていました。

大学では山岳部に籍を置き、夏の穂高や立山、また黒部上ノ廊下の廻行など経験しましたが、元々スキーの志向が強かったため、大学にスキー部を立ち上げ、スキーを中心とした部活動をしました。



広島支部長 齋 陽さん

60歳で職場も定年を迎え、またSAJの役も退いた時期に、先輩の前々支部長・兼森志郎氏から「これからは、のんびり山を歩こう」と勧められ、JACへ入会しました。その後は、広島支部のスキー委員長と自然環境委員会副委員長を務めていましたが、広島支部の2度の遭難事故を受け幹部の方々から退任されることになり、今年4月に急遽、後任の支部長をお引き受けすることになりました。

支部長はお引き受けしたものの、本格的な冬山登山やクライミングなどの登山経験はなく、率先して支部会員の山行をリードすることはできません。そのため、広島支部内外の豊富な経験と技術を有する方々のご協力をいただきながら、支部の運営に当たっていききたいと思っています。

支部再生に当たっては、支部組織の再編と対策はできたものの、魂が入らなければ再生は叶いません。山行の管理・指導の問題、指導者・リーダーの養成が急務であると同時に、全支部会員への「安全指針」の徹底が肝要であり、支部会員の協力の下、全力を尽くすつもりです。

熊本支部長 中林暉幸さん

このたび、熊本支部の支部長を仰せつかることになりました。小さい所帯ながらも60年の歴史を刻む当支部を率いてきた、歴代の支部長に比して非力な私にとつて、いささか荷が重く戸惑うところですが、支部顧問各位の指導の下、会員の皆さん方のご支援をいただきながら、支部の運営に微力を尽くしていきたいと考えています。

幼いころより、西の空を眺め、また東の阿蘇の噴煙のなびく方角を仰いでは明日の天気を占うのが日常の、山間の貧農に育ちました。農事の手伝いの合間には、夏は阿蘇を源とする白川に魚を求めて遊び、冬は鳥を追って野山を駆け巡ったものです。

教職に身を置き高校山岳部を担当するようになって、全国高校総体にも十数回参加させていただく



熊本支部長 中林暉幸さん

うちに、いつしか山にはまっていた次第です。職を辞し身体の原因が利くうちにと、十数年前、誘われるままに熊本支部に入会。気楽に山を楽しもうと思っていたところですが、支部長就任という思いがけない事態に、改めて気を引き締め直しているところです。

支部の課題は多々あります。例に漏れず当支部も会員の高齢化は必然です。それに伴う会員の減少傾向にどう対処して、若返りのために新規加入者増に取り組んでいくかは大きな課題です。近年、幸いにも意欲的な会員による新しい取り組みも提案企画され、徐々にではありますが、魅力ある支部に発展しつつあるのではないかと思います。これらのことを外部にもPRしながら会員の増加にもつながっていくれば、と期待しています。活動が増えれば事故の可能性も増加します。個人山行を含め登山事故の防止・安全登山に対する意識の向上も図らねばなりません。前執行部から取り組んでいる、これらの課題をさらに推進発展させていく必要があると思います。各方面の皆様方の一層のご指導、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

REPORT

第38回日本登山医学学会学術集会開催される

斎藤 繁・夏井裕明

第38回日本登山医学学会学術集会
が、日本女子体育大学総合体育館
多目的ホールにて、夏井裕明会長
の下、平成30年6月2～3日(土・
日)に開催された。両日とも初夏の
好天に恵まれ、山行の誘惑を振り
払って193名の参加者があつた。
日本山岳会は本学術集会を後援し
ており、夏井大会会長が開会式な
どで深謝の意を表明した。

メインテーマは

「登山における安全管理」

大会のメインテーマは「登山に
おける安全管理」だった。山岳遭難
が発生するたびにマスコミで大き
く報道され、当事者たちが世間か
らの逆風にさらされている現状を
憂慮してのテーマ設定であつた。
自然相手の活動であるがゆえに
様々なアクシデントに遭遇するこ
とは避けられないものの、アクシ
デントに遭遇することを想定して
十分な準備を整えておくことが重
要であり、夏井会長の考えがプロ
グラムの各企画に反映されていた。

特にメインのシンポジウムでは、
「学校集団登山における安全管理
―学校と医療の連携―」と題して
学校関係者、医療関係者、山岳関
係者が様々な事例をもとに安全管
理上の注意点を述べ、示唆に富む
内容だった。

特別講演では、「2020年に
向けてのアンチ・ドーピング」と
題して、公益財団法人日本アンチ・
ドーピング機構の事務局長である
浅川伸氏が講演した。他競技にお
いて、同僚選手をドーピングで出
場停止にするという残念な犯罪的
事例があつたことを受けての企画
だった。2020東京オリンピック
で正式競技となるスポーツ・ク
ライミングに関わる方々も多く参
加され、アンチ・ドーピングに関す
る知識を高める良い機会になった。
さらに、登山医学領域での研究
活動推進に向けて、教育講演で「登
山医学研究に必要な統計学」と題
して、岡山大学病院新医療研究開
発センター教授の樋之津史郎先生
が講演した。研究領域で統計学の

重要性が高まっており、
ありがたい企画だった。
今回の大会では、第
35回の学術集会(高松)
と同様に、演者は口頭
発表とポスター発表の
両方を行なった。演者
は両方の準備が必要に
なり負担となるが、今
回も好評で、今後、定
着するかもしれないと
思われた。

「イッテQ登山部」の
安全管理も

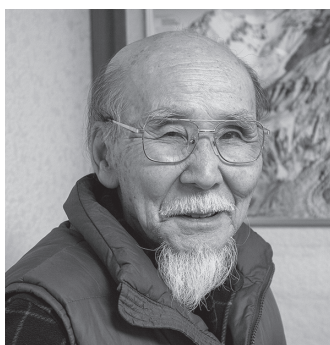
日曜日の午後には、
市民公開講座「イッテ
Q登山部における安全
管理」が開催され、登山
愛好家が多数参加した。人気テレ
ビ番組「イッテQ」のスタッフであ
る国際プロガイドの角谷道弘氏が
講演した。イッテQ登山部は、2
009年以降2017年までに計
10回の遠征を行ない、角谷氏はそ
の多くに関わってきた。遠征では、
登頂を断念したこともあるが、大
きな事故もなく全員が無事帰国で
きたとのこと。これらの遠征時の
写真を供覧しながら、「安全登山」



「安全登山」について熱く語った角谷道弘ガイド

に対する熱意を語った。

会場の日本女子体育大学(東京
都世田谷区)は郊外の閑静な住宅
地にあり、キャンパス中央のグラウ
ンドでは陸上のトレーニングが行
なわれていた。大学院には男子学
生も在籍しているとのこと、男
子トイレも十分に設置されていた。
(斎藤 繁(日本山岳会・医療委員
会担当理事)・夏井裕明(日本女子
体育大学))



大塚博美(おおつか・ひろよし)

会員番号3514

1924年 東京生まれ
 1943年 明治大学入学と同時に山岳部に入部する
 1947年 冬の畳岩尾根から極地法により奥穂高岳登頂
 1954年／56年 日本山岳会第2次、第3次マナスル登山隊に参加
 1959年～60年 日本雪男学術探検隊に参加
 1970年 日本山岳会エベレスト登山隊の登攀隊長を務める
 1988年 日・中・ネ／チョモランマ・サガルマタ登山隊副総隊長
 1999～2002年 日本山岳会会長に
 2018年6月14日 逝去、享年93

大塚博美さんを偲ぶ

平林克敏

日本山岳会の大きな登山計画すべてに参加し、立派な貢献をした泰山北斗の巨匠の一人が世を去った。エベレスト登頂50周年を迎える年まで元気でいて欲しかったが、無念であり残念である。

初めて大塚さんにお会いしたのは、大町高校山岳部が不帰の登攀に行くときであった。「あれじゃあ、マナスルは登れんよ」、小屋の横に突っ立ってそんなことを言ってい

た。自信に満ちた姿が印象的だった。夕食の支度をしていると、「帰るからね。大町高校の人に一飯之恩になったお礼だ」と、食パン1斤を私に渡して帰っていた。1953年正月のことであった。エベレスト組織委員長の三田幸夫さんから企画委員(総務担当)の委嘱を受けると、7名の委員の中に大塚さんの顔があった。このことから、エベレスト登山では折衝事項をはじめ酸素呼吸器の開発、30t強の物資の輸送責任者まで引き受ける羽目になった。

大塚さんが一番力を入れていたのが、南壁の登攀であった。この山に何か新規性を求めることはJACCの総意であり、課題でもあった。大塚さんが「ここを登るんだ」と言っ、右雪田からイエロー・バンドに達する岩相を引き延ばした写真を背に、説明してくれた。「これは難しいや」と思わず口をついて出ると、「ちゃんと登れる奴を考えている」と自慢げに言っていた。しかし、1954年の『The Mountain World』を開くと、そこに「インド空軍撮影の折り込み版9葉」が載っていた。特に大判の写真には、イエロー・バンドに達するクローワールが明確に撮り出されていた。大塚さんの提案するルートでは成功の見込みがないと直感したので、次回また議論した。ネパール政府との折衝を目的に先発したときも、「本隊のスムーズな受け入れと、スキー隊のこのを頼んだぞ」と、大変な仕事ばかりだった。シルワル次官からネパール人の登頂者はいないので、なんとかできないかと懇願された。その記憶からか、私が登頂するとき、「登頂相手はお前に任せる。その場で決めてくれ」と体良く逃げ

られてしまった。大塚さんがJACC会長のとき、百周年記念事業の企画委員に任命された。これをやれば将来、実行部隊の中に組み入れられる可能性がある。エクトでは、その組織を早くから任せる人を決めることが大切と、お前がいつも私に言っていたことではないか。今さら逃げるな……。」大塚さんは戦後の明大山岳部を立て直した、誰もが認める人材であり、ほかの団体からは羨ましく思われるところさえあった、熱い心を持つロマンの人だったと思う。C1で成田君の遺体にすがって泣き崩れたあの姿、南壁を中止するときの不安を前面に出し迷いに迷った姿、第3次登頂を中止させるとききの気の遣いよう、リーダーの決断に程遠い姿の中に、大塚さんへの信頼が重なるのは何故か。よく話し合うと、心の奥深くに冷静な決断と行動力の姿を垣間見ることができる人でもあった。要は、相手次第で能力をうまく発揮できる人物であったと思う。一人の巨星を失ったことを惜しみ、寂寥新たであります。ご冥福をお祈りし、お別れとします。

追

OBITUARY

悼



活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

「花の旅歌の旅」くじゅう連山

縁があつて8年余り前に、岐阜支部に入つて間もなく、「坊がつる讃歌」という歌のあることを知つた。楽曲に激しく魅せられて、一度現地を訪ねてみたいものだと、かねがね思つていたところ今回の企画を知り、欣喜雀躍、すぐに参加申込みをした。

前日大分に泊まり、同宿の北海道支部の女性とともに支部の方の車で筋湯に向かったが、車体に打ち付けるような大雨。ときどき雷ゴロゴロ、この先どうなることだろう。

途中の「野の花の郷」で、大分空港からのメンバーと合流、初対面の挨拶をした。さっそく皆で郷土料理の団子汁や山ごぼう（アザミの根）をおいしくいただいた。

筋湯の八丁原ユールホテルに入

つて荷物を置き、雨衣を着て山群の最も西にある独立峰の涌蓋山へ。ここで私は、初めて間近にミヤマキリシマの花を見た。感動してカメラを向けていたら、支部の方が言われた。「そんなしおれたのを撮ることないよ。明日いくらでもあるから」と。いやいや信じないわけではないが撮り続けましたよ、はい。山頂では支部の方持参の、高級農園の大きなイチゴのおいしかったこと。

翌日は昨日の雨が嘘のような快晴。心も軽く車に分乗して筋湯を出発。牧ノ戸峠で下車。久住山、中岳、白口岳、鉾立峠を経て法華院温泉へと歩を進めた。途中の西千里ヶ浜から眺めれば、北に星生山、南に扇ヶ鼻、もう言葉は要らない。まさにピンクの絨毯の連続だ。花の道を通つて午前11時前に久住山へ登頂し、皆で記念写真。御池遭

難碑の前の平地で昼食をとる。

食事の後、皆で支部長が用意してくださった「坊がつる讃歌」の歌詞カードで、大合唱した。大自然の中で歌うと本当に気持ち良かった。天気にも恵まれ、最高に楽しかった山歩きも終わり、3時半ごろ法華院温泉山荘に到着。夕食を終え、気心も知れて親しくなった北海道支部の方々と個室でゆっくり眠った。

3日目は心の吹きが聞こえたのか朝から雨模様。大船山を割愛し長者原へ下りることになった。原曲である広島高等師範学校山岳部歌「山男の歌」の替え歌なる、「坊がつる讃歌」を作った九大生3人の管理していたあせび小屋を、加藤支部長が案内してくださった。「四面山なる坊がつる／夏はキャンプの火を囲み／夜空を仰ぐ山男／無我を悟るはこの時ぞ」

この美しい湿原に思いを寄せた山男たちの青春の歌は、私の青春の愛唱歌になることだろう。坊がつるが見下ろせる場所で名なごりを惜しみ、再度皆で「坊がつる讃歌」を声を限り歌った。

雨に洗われた新緑が美しく、ウツギ、アジサイ、オオヤマレンゲ

などの花を見ることができ、アサギマダラにも出会えた。

長者原へ予定より早く着いたので足を延ばし、大岳地熱発電所、川端康成の名作『千羽鶴』の続編『波千鳥』の文学碑を見学した後、ひなびた味のある釜ノ口温泉に浸かり、山行の疲れを癒した。

ひとかたならぬおもてなしをしてくださった東九州支部の皆様、本当にありがとうございました。

（岐阜支部・杉山美智子）

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

山梨支部

第1回田部祭

7月21日、奥秩父をこよなく愛し世に知らしめた登山家、英文学者の田部重治の業績を偲び、「第1回田部祭」が田部重治の玄孫・田部泰一さんと山梨市長ら地元関係者が参加して盛大に開催された。田部重治の業績に対しては、30



田部重治レリーフの除幕式



西沢渓谷道での参加者たち

年ほど前、西沢渓谷入り口の旧西沢山荘前に登山靴をイメージした大きな記念碑が設置されている。

一方、田部とともに奥秩父の山々を登り、そのすばらしさを世に紹介した木暮理太郎については、奥秩父の盟主・金峰山が見える山梨県金山平(現北杜市須玉町)にこれも立派な記念碑が設置され、毎年10月の第3日曜日に木暮祭が行

なわれてすでに58回を数えている。

田部と木暮が笛吹川上流、東沢渓谷を初めて遡行(1915(大正4年)してすでに100年が経過した。この東沢遡行100周年や長年実施している木暮祭のことなどを勘案して、日本山岳会山梨支部は「田部祭」開催を、数年前から地元の山梨市や山梨市観光協会三富支部に働きかけてきた。今回、地元が田部のレリーフを製作して記念碑にはめ込み、その除幕式と第1回田部祭を開催する運びになった。

式典は約40人が参加。市観光協会三富支部長の雨宮巧さん(NPO法人山梨市観光振興会事務局長)が田部の業績や田部祭開催に至る経過を報告。玄孫の田部泰一さんのお礼の言葉や、高木晴雄・山梨市長の祝辞などの後、田部さんが除幕してレリーフを披露した。この後、参加者が献花・献酒して終了した。田部の盟友・木暮理太郎の生地、群馬県太田市からも「木暮理太郎の業績を語り継ぐ会」の服部佳郎会長らが駆け付けた。

日本山岳会山梨支部は、支部員17人と「やまなし登山基礎講座」

(1915年から毎年実施)の受講生数人が参加。碑前で記念撮影をし、記念山行を実施した。記念山行は当初、西沢渓谷と東沢渓谷に挟まれた急峻な鷹見岩(1648m)に登り、石塔尾根を下る予定だったが、式典後の時間や雷雨が予想されたため、西沢渓谷を一周する渓谷道コースに変更した。下山直前に猛烈な雷雨に見舞われた。

西沢渓谷はいつ訪ねても太古から宮々と続く渓谷美。特に数多くの滝と豊富な流れでできた巨大な滝壺とその瑠璃色の水。渓谷道にはタマアジサイ、ヤマアジサイ、山吹色のタマガワホトトギスが至る所に咲き競っていた。

(北原孝浩)

越後支部

高頭祭と弥彦たいまつ登山

越後支部では、毎年7月25日に「高頭祭と弥彦たいまつ登山」を実施しているが、特に3年前から「8月11日国民の祝日山の日」の事前行事として取り組んでいる。高頭祭が61回、弥彦たいまつ登山が65回を数える伝統行事であり、還暦の年月を超えて継続して取り組

寄付金及び助成金などの受入報告 (平成30年6月30日まで)

寄付者など	受入金額など (単位千円)	寄付の目的、その他
会田 博 様	6,000	視覚障がい者登山全国大会への指定寄付
大橋 基光 会員	60,000	視覚障がい者登山全国大会への指定寄付
大島 洋子 会員	10,000	視覚障がい者登山全国大会への指定寄付
堀井 昌子 会員	10,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
塩澤 厚 会員	50,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
石川 一樹 監事	10,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
中山 茂樹 理事	50,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
	50,000	日本山岳会運営
野口 いづみ 会員	10,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
シュトゥールトレガー エリッヒ 会員	100,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
尾上 昇 会員	10,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
古市 進 会員	10,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
古野 淳 会員	50,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
中谷 康司 会員	100,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
根井 康雄 会員	5,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
橋本 康孝 会員	3,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
重廣 恒夫 理事	30,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
伊豫田 滋雄 会員	5,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
紺野 会里 会員	30,000	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援

んできた先人への感謝を表したい。
高頭祭は、越後長岡出身の日本山岳会創立メンバーで、第2代会長を務めた高頭仁兵衛翁の遺徳を偲ぶ行事である。また、弥彦たいまつ登山は、越後一之宮弥彦神社の山頂奥之院から弥彦灯籠祭りのご神火として麓の神社本殿に松明を掲げて運び、お祓いを受けたのちに参道から弥彦の市中行進を行なう壮大な儀式である。

越後人の崇敬を集める弥彦山(634m)で開催され、過去に雨天などで中止したことはない。昨年は50年に一度の大雨注意報にも

かわらず開式直前に雨がやみ、今年は梅雨明けが7月上旬で例年より2週間ほど早く、連日猛暑日で熱中症が心配されるほどの天候であった。

今年度の来賓は、日本山岳会から野澤誠司副会長と日本山岳・スポーツクライミング協会から八木原紈明会長をお迎えした。車で弥彦スカイライン経由で高頭仁兵衛翁寿像碑前へ。

14時30分、高頭祭開催、参加者は支部会員50名と一般参加者20名ほどで合計70名くらいか。水曜日

り、高頭翁の遺徳に感謝する地元会員の熱意が感じられる。式典は遠藤越後支部長の挨拶で始まり、神事は越後支部・平田大六氏が肅々と執り行なう。神事終了後、記念碑前で全員の記念写真撮影。猛暑による熱中症が心配されるため、近くのあずまやに移動して野澤副会長から記念講演を行なっていた。

野澤氏は、これからの日本山岳会を発展継続させていくための、若い世代の人材育成強化の必要性を訴え、現在YOUTH CLUBには全国に400人ほどが登録、



高頭仁兵衛翁寿像碑前での式典

活発に行動しているが、越後支部にどのよう波及させていくか相談協議をしていきたい、と述べられた。まさに高齢化が進む越後支部の生き残りを懸けた取り組みになると思われるが、今後も野澤副会長はじめ本部の方々にアドバイスをいただきたいと痛切に感じた。16時ごろから弥彦山山頂へ移動を開始、17時に弥彦山頂奥之院で弥彦神社神官により新潟県安全登山祈願祭が催され、日山協八木原会長の記念講演が行なわれた。八木原氏は、事故や遭難を起こす事例が多発している中高年登山者対策が急がれる一方、スポーツクライミングがオリンピックに採用さ

れ、若い人たちに競技としてのク
ライミングが注目されている。特
に日本の若い選手は世界的なレベ
ルで活躍している。さらにそれに
続く小・中学生の若い世代が多く
育つてきており、非常に楽しみな
状況であると話された。

18時30分にはたいまつ登山が開始
され、山頂奥之院のご神火をたい
まつに灯して麓の弥彦神社を直指
す。参加者は新潟県山岳協会加盟
団体を中心に約200名近い人数
であろうか。途中の山麓登山口か
ら新しいたいまつに交換して、こ
こから地元ボーイスカウトの鼓笛
隊に先導され神社本殿にご神火を
届ける。お祓いを受けた後、たい
まつ行進は参道から弥彦の街へ繰
り出すパレードとなった。

街中は弥彦灯籠祭りの神輿でに
ぎわっているが、たいまつ行進隊
が通ると全員拍手をもって盛大に
迎えてくれ、さらに夜空にスター
マインの花火が上がり最高潮の雰
囲気で盛り上がった。たいまつ登
山の事前準備や当日の規律ある行
進など、すべてを取り仕切った弥
彦山岳会（小林頼雄会長は当代会
員）には頭が下がる思いである。

20時30分にJR弥彦駅到着後解

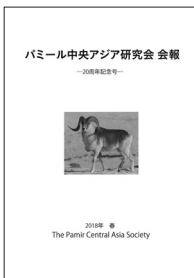
散、21時に弥彦村民ホールで打上
げ慰労会。22時ごろに宿舎に戻り、
ひと風呂浴びてから来賓と越後支
部関係者との懇親会へと続き、24
時ごろ終宴となった。

翌26日は宿舎を出発して、車で
長岡市へ向かう。高頭仁兵衛翁の
菩提寺である長岡市深沢町の正林
寺にて墓参。高頭家の旧邸宅跡は
長岡市に寄贈され、現在、河内公



図書紹介

パミール中央アジア研究会 パミール中央アジア研究 会会報——20周年記念号——



2018年3月
パミール中央アジア研究会
B5判 128頁

パミール中央アジア研究会（パ
中研）は1996年4月に発足し
た団体で、パミールと中央アジア

園として管理されている。地元住
民にも篤志家として尊敬され、
「翁高頭仁兵衛氏碑」と書かれた大
きな頌徳碑が建立されている。高
頭仁兵衛翁生家跡地からは、幼少
期よりこよなく愛した魚沼三山が
眺望される。昭和33年に没し「三
山を持ちて行きたし死出の旅」が
辞世の句で、その風景を実感でき
る場所でもある。（桐生恒治）

の、山と歴史を学んで遊ぶコミュ
ニティ。現在の会長は田村俊介氏
山行報告や関心あるテーマにつ
いての発表を行なう例会と、パミ
ールに関連した書籍の内容紹介を行
なう読書会とを交互に開催。

会合は飯田橋の勤労者山岳連盟
会議室で行なわれている。会合の
後に開かれる飲み会は、フリート
ーク形式で会員相互の情報交換の
場だ。また、現地視察旅行、懇親
山行、雪山スキー合宿なども随時

図書受入報告(2018年7月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
田邊純	松方三郎とその時代	446p/20cm	新聞通信調査会	2018	出版社寄贈
高橋政男(編)	ハケ岳を守って60年：諏訪地区山岳遭難防止対策 協会60周年記念誌	51p/30cm	諏訪地区山岳遭 難防止対策協会	2017	発行者寄贈
溝淵三郎・他	冒険の蟲たち(新装版)：登った! 漕いだ! 走った! アメリカ大陸5万キロ	279p/21cm	白山書房	2018	出版社寄贈
山と溪谷編集部(編)	登山用語小辞典：「山と溪谷」2018年8月号 (通巻1000号)付録	232P/19cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
富山県山岳連盟(編)	太刀の嶺高く：富山県山岳連盟創立70周年記念誌	144p/30cm	富山県山岳連盟	2018	発行者寄贈
Reinhold Messner	Absturz des Himmels (ハングル版)	380p/22cm	Haroojae Club	2018	発行者寄贈
Haroojae Club	Shadow of the Matterhorn (ハングル版)	716p/24cm	Haroojae Club	2018	発行者寄贈
吉田二郎 著	鹿島槍研究	289p/22cm	朋文堂	1957	鈴木昭氏寄贈

☆ 鈴木昭会員からはその他9冊の図書をご寄贈頂きました。皆様ご協力ありがとうございました。

行なわれる(<http://pamir.jp>)。

本会報は綺麗な写真を多数含む
重厚な仕上がりで、次のような構
成である。

○はじめに(田村俊介)

会による提言「パミールは高原で
はない」

○2編の登山記

パミールの最東部チャイニーズ・
トルキスタンの山々(絹川祥夫)
パミール・イシュカシム山群の最高
峰 PikMayakovsky (6095m)
登頂(角張嘉孝)

○2編の紀行文

バルタン紀行(本多海太郎)
パミールを歩いたオーレル・スタ
イン(井手マヤ)

○3編の会員旅行記

新疆ウイグルシルクロード旅行記
(本間正士)

中央アジア旧三汗国(ブハラ・ヒ
ヴ・コカンド)の旅(海保健)
ヌラタ山脈北麓紀行ケシの群落を
求めた短い旅から(越田和男)

○1編の随想

地図にハマってしまった頭(山本
猛)

○追悼文

加藤さんとの52年間(田村俊介)
加藤九祚先生年譜、学位記、受賞歴

圧巻は日本の教科書に記載され
ている「パミール高原」は「パミ
ール」と訂正した方が良いとする提
言。パミールに興味を持つ登山家
や考古学者、地理学者らに声を掛
け、共同提案している。この記事
はすでに朝日新聞に紹介されてお
り、目に止まった会員も多いと思
う。会員により撮影されたパミ
ール7000m峰の写真、地図およ
び各国の地図帳の紹介があり、提
言の説得力が増す。すでに著名な
地図出版会社など数社から好意的
なコメントが寄せられており、今
後の対応が大いに期待される。

10周年以降、中央アジア東部の
新疆ウイグル(2013年)、中央
アジア旧三汗国の現地遺跡探訪
(2014年)、また会員によるパ
ミール南西部の山岳登攀、アムダ
リア源流を見極める旅など、「パ
ミール」ならではの歴史を確かめ
る紀行文が満載だ。

(角張嘉孝)



会務報告

平成30年度第4回(7月度)理事会

議事録

日時 平成30年7月11日(水)19時00
分〜20時15分

場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤各
副会長、神長・永田・古川・

谷内各常務理事、安井・清
登・星・近藤・波多野各理
事、平井・石川各監事(所
用のため近藤理事は審議
事項1まで欠席)

事項1まで欠席)

【欠席者】中山副会長、斎藤理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・チャムラン遠征隊への援助金
支出について

日本山岳会青年部チャムラン登
山隊2018に対し、海外登山基
金から援助金を支出することにつ
いて審議した。(賛成11名、反対な
しで承認)

2・支部助成金等および新入会員
報奨金の送金について

平成30年7月中に支給する支部
助成金について、会員および進会
員1名に付き2000円、新入会
員等獲得報奨金を会員および進会
員1名に付き4000円を送金す
ることについて審議した。(賛成
12名、反対なしで承認)

3・平成30年度(前期)海外登山助
成金審査報告について

海外登山助成金審査委員会の審
査報告を受けて審議し、平成30年
度(前期)海外登山助成金を以下の
登山隊4隊に対し助成することと
した。(賛成12名、反対なしで承
認)

・Giri-Giri Boys Kishitowar
Expedition 2018

・日本ニルギリ登山隊2018

・青山学院大学体育会山岳部東ネ
パールWhiewave登山隊

・法政大学体育会山岳部ニレカ

ピーク登山隊2018

【報告事項】

1・入会希望者19名、入会希望団体1団体、準会員入会希望者8名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2・寄付金19件の受領について報告があった。(古川)

3・創立120周年に向けた長期計画(改善計画)策定の必要性について報告があった。(重廣)

4・当会が所蔵する「アルバータのレプリカ・ピッケル」をカナダ山岳会へ寄贈することについて報告があった。(神長)

5・国土地理院ワーキング・グループの活動について報告があった。(安井)

6・上高地山岳研究所受水槽工事関連の進捗状況について報告があった。(安井)

7・登山計画書の提出状況について報告があった。(永田)

8・平成30年度通常総会集計結果について報告があった。(谷内)

9・ぐんま山フェスタ2018の開催について報告があった。(谷内)

10・「山」7月号の発行について報

告があった。(神長・節田)

11・当会が内閣府賞勲局より7月2日付で褒章条例に関する内規第2条に基づく公益団体として認定されたとの報告があった。(小林)

【今後の予定】

1・常務理事会

・平成30年度8月度常務理事会
8月7日(火)18時30分 集会室

ルーム日誌 7月

2日 総務委員会 医療委員会

3日 常務理事会 青年部 スケッチクラブ

4日 図書委員会 山行委員会

5日 YOUTH CLUB スキークラブ

6日 YOUTH CLUB
山の自然学研究会

7日 資料映像委員会

8日 山岳研究所運営委員 フォトクラブ スケッチクラブ

9日 理事会 休山会 山想倶楽部

10日 支部事業委員会 山岳地理クラブ 九五会
公益法人運営委員会 YOUTH CLUB

17日 スキークラブ

18日 YOUTH CLUB 三水会 つくも会

19日 科学委員会 みちのり山の会 マウンテンカルチャークラブ

20日 会報編集委員会 フォトクラブ

21日 緑爽会

22日 総務委員会 医療委員会

23日 平日クラブ

24日 家族登山普及委員会 麗山会
25日 公益法人運営委員会 学生

部 山遊会

31日 里山歴史研究会
7月来室者 451名

会員異動

退会

富田郁夫 (8491) 茨城

今野俊一 (14643) 宮城

本多直也 (14771) 群馬

金子肇 (15399) 群馬

羽田淳一 (15502)

高橋美江子 (16130) 岐阜

森戸圭子 (A0116)



◆第36回図書交換会の出品図書募集について

図書委員会

例年、年次晚餐会会場で開催し、多くの会員から好評を得ている図書交換会を本年も年次晚餐会会場で開催する運びとなっています。山岳書の出品をお願いいたします。図書交換会で希望者に頒布します。

出品図書は9月10日までに、会員番号を明記して日本山岳会・図書委員会宛にお送りください。ただし、雑誌類は原則としてお断りしています。

なお、これまでは頒布価格の一部を出品者にお返ししていましたが、そのためのトラブルが生じたため、入札本を除き、今回から無

償で出品していただくことになりました。それによって生じた収入は、経費を引いた上で年次晩餐会の会計に繰り入れることになっています。ぜひ、多くの出品本をお寄せください。

問合せ 近藤雅幸 ☒satoyama-

sgy79.69@icom.home.ne.jp

◆四国八十八ヶ所歩き遍路④ 順打ち1国香川参り

山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ち(2年間)の4回目です。愛媛県の65番三角寺からスタート、88番大窪寺で結願します。(1日20〜30km、健脚向き)。

日程 10月19日(金)〜10月28日(日)

9泊10日

集合 19日(金)愛媛県JR伊予西

条駅7時30分(18日(木)バイレーツ号夜行バス 渋谷マークシテイ20時20分発)JR伊予西条駅7時着 あるいは18日前泊

行程 19日伊予土居(泊)、20日65

番別格18番三好市(泊)、21

日66番69番観音寺市(泊)、

22日70番75番善通寺宿坊

(泊)、23日76番80番国分寺

町(泊)、24日81番83番高松

市(泊)、25日84番87番さぬ

き市(泊)、26日88番コミュニ

ティバス志度高速バス停南

海なんば紀見峠(泊)、27日町

石道高野山奥之院宿坊(泊)、

28日金剛峯寺ほか見学(解散)

費用 参加費1万円(通信費、写真

代など)、1日1万円(宿泊代は

そのつど精算、納経、昼食代)、

遍路用品は約2万円。別途往復

交通費。

定員 10名(先着順)

申込み/問合せ 10月5日(金)まで

数見直し

TEL 090-7204-4668

☒sanko@jac.or.jp

◆吾妻耶山と谷川連峰(茂倉岳―朝日岳―白毛門)縦走

紅葉を訪ねて、「群馬百名山」の

吾妻耶山と谷川連峰東部「日本三

百名山」の名峰・朝日岳への縦走

に挑戦してみませんか!

日程 10月12日(金)〜14日(日)

集合 12日(金)上越新幹線上毛高

原駅9時。

行程 12日吾妻耶山往復(歩程

約4時間45分・湯檜曾温泉泊)、

13日茂倉岳―武能岳(歩程約

6時間55分・蓬ヒュッテ泊)、14

日七ツ小屋山―朝日岳―笠ヶ

岳―白毛門―土合駅(歩程約8

時間15分)鈴森ノ湯(入浴)上毛

高原駅(解散)《健脚向き》

費用 2万8000円(宿泊費・

タクシー代・保険料など)

募集人数 先着8名まで

申込み 9月7日(金)までに三枝光

吉へ

TEL 080-6627-5687

☒sanko@jac.or.jp

*傷害保険加入のため性別・生年

月日を、参加者名簿作成用に会

員番号、住所、緊急連絡先、電

話・携帯電話番号をお知らせ下

さい。

◆「青いケシの世界」写真展

ヒマラヤの青いケシのほぼ全種

類を写真で展示いたします。

日時 10月2日(火)〜8日(月・祝)

9時〜4時半 最終日は午

後3時まで

場所 新宿御苑アートギャラリー

問合せ 「青いケシ研究会」山下

順子

TEL 049-269-3577

☒junpoppy@yahoo.co.jp

◆編集後記◆

●8月上旬は栗駒山に行つてきました。岩手県側の名湯・須川温泉から登り、宮城県側のイワカガミ平に下山しましたが、中央コースの登山道にはびっくりしました。コースの下半部が碎石を混ぜて固めたコンクリート造りで、これがほぼ一直線に下山口まで続きます。50年以上、全国の山を歩いていますが、こんな道は初めてです。

●「道」という存在は、自然と人間の営為とが融合した「文化」ではないかと思います。この山は崩壊しやすいので、メンテナンス優先の措置でしょうが、余りにも歩く人の気持ちに斟酌していない造りだと思いました。須川温泉がすばらしく、コースも変化に富んで面白かっただけに、画竜点睛を欠くの感がありました。(節田重節)

日本山岳会会報 山 879号

2018年(平成30年)8月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社